

## 高齢者におけるホルター心電図異常所見の発生状況

◎有村 春菜<sup>1)</sup>、島本 亜耶<sup>1)</sup>、鈴木 紫帆<sup>1)</sup>、兼松 健也<sup>1)</sup>、中村 文子<sup>1)</sup>  
順天堂 大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター<sup>1)</sup>

【目的】ホルター心電図検査は不整脈や心筋虚血の精査などを目的に実施される。長時間記録することで、安静時心電図で出現しえなかった所見や生活に起因する心電図異常が検出できる。しかし解析のタイミングや緊急連絡基準は施設間で異なるのが実情である。そこで、高齢者におけるホルター心電図の即時報告基準の構築を目的に今回は当センターの心電図異常の発生状況を調査した。

【対象と方法】対象は2021年1月から2023年10月にホルター心電図を実施した65歳以上の外来患者1,031名（男性502名、平均年齢77.7歳）である。ホルター心電図解析結果から、①3秒以上の心停止、②3発以上の心室期外収縮、③3発以上の上室性期外収縮、④心房細動、⑤徐脈（ $\leq 40$ 回/分）、⑥頻脈（ $\geq 150$ 回/分）、⑦新規のST上昇や陰性T波、⑧Mobitz II型以上の房室ブロックの出現状況を確認、検査から2ヶ月内の予後との関連性を調査した。統計的有意差はスチューデントt検定で評価した。

【結果】本患者群におけるホルター心電図の目的は、安静時心電図で所見あり精査が53%、胸痛動悸の精査が25%、

めまいふらつきが17%の順であった。各所見の出現頻度は、①5%、②14%、③63%、④9%、⑤16%、⑥19%、⑦1.6%、⑧0%であった。ホルター心電図実施から2ヶ月以内の死亡例はないが、カテーテルやペースメーカー装着の処置が12%で実施された。また、処置例となし例を多変量解析で比較すると、「3秒以上の心停止」が有意に処置されていた（オッズ比 18.3、 $p=0.004$ ）。また、心室期外収縮や徐脈は、高齢者ほど高頻度に発生していた。

【結語】3秒以上の心停止は失神や転倒の危険性が高く、患者の予後に大きく影響する不整脈であるため、即時報告の重要性が示唆された。今後調査件数を増やしホルター心電図の即時報告基準を構築する。

連絡先 03-5632-3111